

機械翻訳と第二言語ライティング — 有益なツールか深刻な脅威か —

主催： 東京大学教養学部附属
グローバルコミュニケーション研究センター
共催： 東京大学教養学部英語部会
駒場言葉研究会

問題提起

トム・ガリー Tom Gally

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 教授

略歴

1957年 米国生まれ

1983年 来日 日本語学習開始

1986～2005年 フリー翻訳者（日→英）、辞書編纂者など

2005年～現在 東京大学の教員

学部：英語プログラムの開発と運営

大学院：言語教育、言語政策、辞書学などに関する研究と研究指導

機械翻訳の長所

(日→英、英→日)

- 比較的硬い文章の場合は
 - 原文の意味が概ね通じる
 - 平均的な第二言語執筆者が書く文章よりも自然で正しい
- 第二言語で自力で書くよりも
 - 速い
 - 楽
- 無料

機械翻訳の短所

(日→英、英→日)

- 誤訳、意味不明な訳がまだある
- 会話調、砕けた文、方言などには弱い
- 原文の意味を把握しているわけではない

原文 : I read the article in the newspaper.

GT : 私は新聞の記事を読んだ。

原文 : In English, articles come before nouns.

GT : 英語では、記事は名詞の前に来る。

原文 : I was born in 1990, and my sister was born in 1989.

GT : 私は1990年に生まれ、私の妹は1989年に生まれました。

効果的な利用方法

(日→英)

- 日本語（母語）で書いた文章を機械翻訳にかける
- 機械翻訳に出力された英文を確認する
- 入力する和文を調整する
 - 主語を補う
 - 誤訳された表現を変える
 - 修飾・非修飾の関係を明確にする
 - 文の構造を平易にする など
- 調整された和文を再度機械翻訳にかける
- 出力された英文を修正する（固有名詞、専門用語、単数と複数、代名詞の性など）

日本語力も
英語力も
必要！

問題の提起

1. 第二言語学習者は実際はどのように機械翻訳を使っているか
→ 後ほどの発表
2. ビジネス、研究、国際交流など第二言語の使用現場では機械翻訳が実際にどのように使われているか
3. 第二言語学習者が機械翻訳に頼ると言語習得が実際に遅れるか
4. 第二言語教育者は学習者の機械翻訳使用にどのように対応すべきか（推進？黙認？禁止？）
5. 機械翻訳の精度が今後も上がり続ける場合は、第二言語教育、特に外国語教育の目的と意義がどのように変わり得るか

東京大学教養学部の場合

- 1年生全員が英語アカデミックライティングの授業（ALESS/ALESA）を履修する
- 学期末までに約1500語の論文を英語で書く
- 授業では論旨、論理、執筆プロセス、ピアレビュー（相互相談）などが特に重視される
- 東大生は「効果的な利用方法」には十分な日本語力と英語力を持つ
- 学生による機械翻訳使用の現況は不明（今後調査する必要あり）
- 悪質な利用（既存の和文を機械翻訳にコピペする）が考えられるが、まだ確認されていない
- 教員側では機械翻訳への対応についての議論が始まったばかりで、結論はまだ出ていない
- 半数以上の教員は日本語が読めない英語母語話者である

今日の予定

- **機械翻訳技術について**
隅田 英一郎
- **大学生が第二言語ライティングにどのように機械翻訳を使うか**
西山 幹枝、松田 紀子、青田 庄真、梁 晶晶
休憩
- **提起された問題に関するグループディスカッションと全体討論**
司会：トム・ガリー

今後の予定

「MTと言語教育」のメーリングリストで
議論を続けましょう

(詳細は配布資料に)